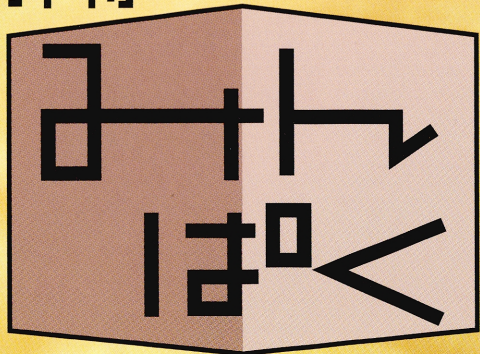


月刊

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283
平成19年11月1日発行 第31巻第11号通巻第362号

国立民族学博物館
2007



11



特集

開館三〇周年記念特別対談

JICA 理事長

緒方貞子

本館館長

松園万亀雄

地の先へ。
知の奥へ。
みんぼく
30th
Anniversary

人類学の未来

中沢 新一

なかざわ しんいち / 1950年山梨市生まれ。多摩美術大学芸術人類学研究所長、同大学芸術学科教授。おもな著作に『チベットのモーツアルト』『森のパロック』『カイエ・ソバージュ(全5巻)』『精霊の王』『アースダイバー』(講談社)『芸術人類学』(みすず書房)『ミクロコスモス』(四季社)などがあ

Anthropologie というには、二種類の日本語がある。ひとつは言うまでもない「人類学」で、

二〇世紀にその学問が大いに隆盛をきわめたころには、そのなかにさらに文化人類学や社会人類学や経済人類学のようなたくさん太い枝がわかれ、研究は豊かに繁茂した。

しかし二〇世紀も後半を過ぎると、経済のグローバル化や通信交通の発達によって、いわゆる「未開社会の研究」を根幹にすえる、マリノフスキー以来のこの学問の屋台骨は、しだいに内側から突き崩されてきた。そのため今日では、「人類学批判」を掲げる新しいタイプの学問のほうに、若い研究者の関心は集まっている。よつするに、「人類学」と翻訳された Anthropologie は、今あまり元気がないのである。

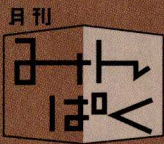
しかし、もうひとつの Anthropologie があることを忘れてはならない。「人間学」と訳されてきたその学問は、一八世紀に哲学者カントがケーンヒスブルク大学の講義題目として案出したもので、現代の「人類学者」たちは今日まで、それにほとんど注目してこなかった。カントは「人間学」の講義において、人類の心とは何か、という普遍的な問いかけから出発して、文化の多様性や人間心理の不思議を解明する、その当時にはまだ未知の学問だった Anthropologie

を構想したのであった。

この学問の根幹は、ホモ・サピエンスであるわたしたち人類の心の構造とその認知の能力にすえられている。人類の心は、超越的なものが「ある」ということは直感することができるが、認知能力に限界があつて、それを認識することはできないようにできている。ここから、神話思考や宗教にかかわるすべての人間的現象が発生する。社会のつくられかたや、自分が知覚した環境世界の事物を分類して、そこから世界観の図式を生み出してくるのも、この認知の能力をもつた心なのである。

したがってこの「人間学」では、「遅れた社会」の研究だけが優先されることはない。フィールドワークはいかかわらず重要だけれど、旅や探検が今までどおり意味をもつわけではない。その証拠に、宇宙空間にまで進出した人間は、自分が何者であるかを知らないままだ。「人間学」である Anthropologie は、その人類の心という、いまだに未知の大陸の探究をめざすのである。

この「人間学」は、いま危機がささやかれている「人類学」よりも、大きな学問である。わたしは今までの「人類学」を、カントの構想したような「人間学」に脱皮させていくことによつて、この学問を真に二一世紀の学問として生まれ変わらせたい、と望んでいる。



目次

NOVEMBER 2007 11
月刊みんばく

01 エッセイ 世界へ世界から
人類学の未来
中沢 新一

02 特集
開館30周年記念特別対談
国際協力に民族学の
知識と経験を
緒方 貞子・松園 万亀雄

10 地球ミュージアム紀行
トン族観光のおすすめ博物館
兼重 勇

11 表紙モノ語り
オセアニアの柳
小林 繁樹

12 みんばくインフォメーション

14 万国津々浦々
けがれ、衛生管理、あるいは癒し
森 明子

15 時論・新論・理想論
東南アジア「15年サイクル説」
田村 克己

16 外国人として生きる
あるソニンケ商人の人生
—アフリカからアジアへ—
三島 禎子

18 2007年春 特別展
「聖地★巡礼
—自分探しの旅へ—」
をふりかえって
大森 康宏

20 生きもの博物館
観光資源としての植物
落合 雪野

22 フィールドで考える
タイの漁民と頭家
小河 久志

24 開館30周年記念事業のご案内
次号予告・編集後記

国際協力に民族学の知識と経験を



MATSUZONO MAKIO OGATA SADAKO

松園万亀雄・緒方貞子

(本館館長)

(JICA 理事長)

世界には一五〇を超える開発途上国があり、人口の約八割が住んでいる。そこでは「貧困」「紛争」「環境」などの問題が深刻化しているといわれる。民博は開館以来三〇年間、おもに開発途上国に関する地域に密着した知識を蓄積してきた。これらの知識を国際協力の現場に役立てるには何が必要なのだろうか。民族学の可能性を語り合う。

国際協力機構と民博

国際協力機構（JICA）は、政府の開発援助（ODA）の中心的な実施機関として、開発途上国を中心に、世界中で国際協力活動をおこなっています。開発途上国を調査研究する機関として、民博もJICAと新しい交流ができるのではないかとということで、国際協力にかかわって、いろいろお話をうかがうことができたと思っています。

民族学という分野は文化人類学という名前でも知られていますが、国際協力とは、これまでそれほど接点がありませんが、いかがでしょうか。

緒方 民族学は必ずしも国際協力と反するものじゃないと思います。国際協力の理論的手段としての民族学ということでは整理はできていません。でも、最近接点が増えているんじゃないでしょうか。

松園 今、民博には約六〇人の教員がおりまして、ほとんどが海外で調査をしていて、それも途上国が中心です。わたし自身は一九七〇年代から主としてアフリカの調査をしています。

緒方 ケニアがフィールドだと。

松園 はい。わたしは三〇年ほどずっとケニアなどアフリカで調査をしておりますけれども、年を重ねるにつれて、日本からやって来るJICAの人やその他の援助関係者と調査地で遭遇することが多くなりました。民族学者というのは、地元にかなり長いあいだ張りついて調査をしています。現地のことを使ってやっておりますから、住民たちが生活のうえでいけば何を欲しがっているのか、というようなことがいろいろわかっていきますし、何か新しいものが導入されれば現地社会のどこにどんな変化が生じるのか見当がつけられます。

男女間で仕事の種類がくつきりわかれていて、それを破ることがタブーにさえなっている社会では、たとえば井戸や水道ができれば、いちばん影響を受けるのは女性と子どもでしょう。水運び、炊事洗濯、家で飼っている家畜への水やりが楽になります。それにくらべたら、水道がきたからといって成人男子の行動に大きな変化はない。衛生の点からトイレを普及させるにしても、まず人びとが人糞というものをどう見ているかということを考えずに勝手に作って、「はい使って」と言っても結局、誰も使ってくれないということになりかねません。

ですから、わたしたちの調査の結果を援助の人たちに使っていただけたらありがたいと、わたしはそう思っております。それで、一九九九年にJICAから出ている『国際協力研究』という雑誌に「国際協力と人類学の接点を求めて」という論文を書かせていただきました。そのころJICAのさまざまな事業評価の報告書を拝見して、技術のこと、経済のことはよく書いていらつしやるけど、社会とか文化についての記述が非常に少ないという印象をもちました。そこで、開発の事業を進めているJICAと、いいコンタクトをもちたいなと、ずっと願っていたんです。

わたしは四年前に民博に赴任してから、民族学も、実際に目に見えて現地の人びとの役に立つようなことをもう少しやってみたほうがいいのではないかと思ってきました。それで「文化人類学の社会的活用」という機関研究を始めました。

機関研究というのは民博全体で推進していく研究プロジェクトですね。

松園 そこにはJICAと関係の深い民族学・社会学の研究者にも参加していただいております。北欧やカナダで開発事業と民族学を含む社会科学がどういふふうな関係になっているのかということを知るために、研究者をよんでシンポジウムを開催したり、そういうことをいろいろやってきました。

文化を全体として見る視点

緒方 今のお話をうかがいまして、わたしは非常にありがたいことだと思えました。と申しますのは、わたし自身は開発という仕事をしたことがないので、むしろわたしは政治学、また歴史学の研究者でございま

すし、国連難民高等弁務官というのは、紛争とか政治的迫害によって居住地を離れざるをえなくなった人の支援でございました。そこでいちばん悩んだのは、支援しても政治的解決がなければ解決しない問題が多くあることです。紛争から逃げてきた人たちがある時点で帰れるような状況になりますと、帰っていく国における経済開発、社会開発、よりよい統治というものが必要になります。その過程で、開発機関から来る援助がもの足りないという思いは、ずいぶんもちました。そして、遅い（笑）。

もうひとつわたしは、JICAに来てから非常に興味深く観察していると言ったら大変おもしろい話なんですけども、日本の経験を相手に渡す、JICAではこういう考え方が強いんですね。特に戦後の日本の輝かしい復興というものが注目されておりますから、それを相手に技術的にもいろいろなかたちで知らせるのが大きなテーマになっているんです。ただわたしの感じでは、日本の経験をそのまま渡せるようなところはないんじゃないかと思えます。

松園 個別に特徴もありますし。

緒方 そうです。相手の国々はそれぞれの歴史、文化、風習がありますから、そのなかで日本の経験が理解できるようなかたちで、こちら側も接点を見つけていかなければならない。これはつねつね思っていることです。松園さんがおっしゃることとかかなりマッチする考え方と思うんです。

松園 よくわかります。

緒方 その意味でわたしは、民族学、社会学等々の研究はとても大事だと思っております。もともと難民高等弁務官時代にも、スタッフは緊急対策のため難民の避難している現場を歩き回りますけれども、時間があ

つたら相手の国の博物館を見て来なさいということではなく言ったんです。相手の国の歴史や文化に対する尊敬の念なしに、援助はするべきじゃないと思っておりましたから。そういう点ではおっしゃることは理解できますし、必要だと思えます。

もうひとつ現実の問題になりますと、途上国と言っても多くございますから、民族学というひとつの学問だけで通用するようなものはないんじゃないでしょうか。相手の国の文化とか、歴史とか社会構造だとかは、かなり個別な場合が多いんじゃないでしょうか。



JICAの水供給プロジェクトを視察(2004年5月 エチオピア)写真:JICA



対談文中に登場する国

一九九四年にルワンダでジェノサイド(民族大虐殺)がありました。国連はそれに対応しなかったとよく言われますけど、じつはルワンダ難民というのが出てきた最初は、一九六三年か六四年なんですね。それを国際社会は二五年ほつといたんですね。対応してこなかったんです。

そのなかでも、忘れられないような光景というところ、どういうところですか。
緒方 平均、一年に三回くらい行っておりました。悪いことがあった国は全部行きましたね。
 今でも忘れられないのはルワンダを見た一〇〇万人近い人たちが移動している光景です。それはすごいんですよ。難民がゴマのキャンプにたどり着いてすぐコレラが大流行になりました。おそらくわたしがルワンダの首都のキガリからコンゴ民主共和国(ザイール)東部のゴマまでジープの隊を組んで行った最初の民間人だと思えますけども、ほとんど浅間山の鬼押し出しみたいな溶岩台地の上にキャンプをずーっと作っていかねければなりません。それはすごかったですね。

松園 そのとおりだと思います。それぞれの文化の特徴に合わせて、それを尊敬しながら対応しなければならぬことは、おっしゃるとおりです。民族学者は文化を全体として観察するように訓練されていますし、中央政府と地域との関係、さらに近隣の社会も視野に入れていきます。また植民地化の前後から現在までの歴史文書、報告書のたぐいを読むことは今では民族学調査の常識になっておりますし、一方で老人たちの言い伝えにも耳をかたむけております。

松園 アフリカでは七〇年代、八〇年代、九〇年代にないかと思えます。
緒方 そういうことを頭におくということは、共通していると思えます。

松園 先ほど日本の援助をそのまま途上国にもっていくことは適当ではないかもしれないということをおっしゃいましたけど、日本社会の場合、社会全体が進んでいるんですね。田舎の人も都会の人も少いずつ一緒に進んでいるけども、アフリカの場合は極端に言うと、同地的な部分だけが変化していて、他のところがそれについていけないということがあるだろうと感じています。日本の経験も役立てればいいんですけども、そももいかないこともいっぱいあるだろうと思えます。



緒方 貞子 (おがた さだこ)
 1927年東京生まれ。米国ジョージタウン大学で修士号、カリフォルニア大学パークレー校で政治学博士号を取得。1976年に日本人女性として初の国連大使となり、国連人権委員会政府代表、上智大学外国語学部長を経て、1991年国連難民高等弁務官に就任し、2000年末に退任。その後、人間の安全保障諮問委員会委員長などを務め、2003年JICA理事長に就任。著書は『紛争と難民—緒方貞子の回想—』(集英社)、『私の仕事』(草思社)ほか多数。

るにつれて、変化のスピードが非常に早くなっている。今現在、アフリカにいる人たちのおじいさんたちがどういう暮らしをしていたかというところ、たぶんまだ毛皮を着ていたんですね。
緒方 動物からとったままのね。
松園 それをなめして着ていたわけですね。そしてウシを飼って、ヒエが何かを作って、もちろんプラスチックのものはないし、金属製のものがあつたかどうか、そういう暮らしをしていたのがおじいさんたちの世代ですよ。今はどうかというと、インターネットを使っています。

ケニアのナイロビには十数年前、手数料をはらってファックスを送信してくれる店がたくさんあったのですが、それが今では全部店じまいしてインターネット・カフェに姿を変えています。
緒方 アフリカの場合は、段階を飛び越えて変わっていきますね。

松園 先ほど日本の援助をそのまま途上国にもっていくことは適当ではないかもしれないということをおっしゃいましたけど、日本社会の場合、社会全体が進んでいるんですね。田舎の人も都会の人も少いずつ一緒に進んでいるけども、アフリカの場合は極端に言うと、同地的な部分だけが変化していて、他のところがそれについていけないということがあるだろうと感じています。日本の経験も役立てればいいんですけども、そももいかないこともいっぱいあるだろうと思えます。
 わたしがアフリカの農村で暮らしていて、よく考えて

松園 独立してからですということですか。

緒方 そうですね。独立する前は多数派のフツ族が少数派のツチ族に虐げられていた。社会革命でこれが逆転するんです。その過程で難民が出始めました。

松園 あとソマリアはいかがでしたか。

緒方 ソマリアの内戦はひどくなったり軽くなったりで、ずいぶん長い付き合いになりました。スーダンには難民がかなりいましたけども、わたしは二回くらいしか行ったことがないんです。

わたしはフィールドの研究者じゃなかったんで、一カ所に長期にいるわけではないんです。ただフィールドにいる人の話を直接聞いて、どうするか決めなきゃいけないですよ。わたしのような仕事というのは、どの職員をどこに配置するのかを決めると、半分仕事は終わるようなものです。マネージメントの仕事というのは、いい人事にかかるとよく言われましたけれど、それと現場で話を聞いてものを決めていかなきゃいけない。

松園 緒方さんから見ると、わたしたちの仕事はまだろっこしいと思われるかもしれませんが(笑)。

緒方 民族学は、長いタイムスパンで考える学問ですから。

松園 難民に対する緊急人道支援と、JICAがこれまでやってきたような開発援助は少し違うなという印象をもっております。生活基盤を根こそぎ奪われて住むところもないという人たちと、伝統的な生活基盤があつて、そのうえで生活環境を改善したいという人々への支援の切迫感と方法は、当然違ってくると思います。JICAはもう少し長いタイムスパンで、問題を見つけないと、住民たちが欲しいがっている援助と、援

いたことがあります。それは、比較的に変化の波からとり残されていて、伝統的な生業のかたちを維持している人たちに、日本の農村、漁村で暮らしてきたふうの人たちの知恵と技術を直接伝えられないかということなんです。JICAにはシニア海外ボランティア制度がありますから、すでにそうしたことは一部分始まっているわけです。これまで外国暮らしをしたことのない、日本語しか話してこなかった、しかし自然のなかで野菜や果樹栽培、漁業、畜産、木工などの技能を身につけてきた熟年以上の人たちが、そうしたところにとんとん出かけるようになって欲しいなと思っています。いわば、庶民レベルの知恵の交流なんです。



小さな時から家事の手伝いをする(2002年8月 ケニア)
 写真: 松園万竜雄

アフリカから考える

緒方さんはアフリカには国連難民高等弁務官時代にも何度も行ってらっしゃると思うんですが。

助する側が考える優先順位が違うということは往々にしてありうることでしょから、その点は慎重にしなければなりませんね。だからこそしっかりと事前調査が必要なんだろうと思います。現地の人間のことをよく知っている研究者は、住民と援助側とのあいだに立つ、いわば文化の仲介者、ブローカーのような役割を果たすことになるのかもしれない。

一九九〇年代くらいから欧米でもそうなんですけど、日本のODAもかつてはインフラ中心の援助だったのが変わってきました。社会開発とか、人間開発とか、草の根、住民参加ということがキーワードになった。

緒方 教育とか医療とか、そういうことを始めたわけですが、非常に長くやってきたのは農業開発じゃないですか。アジアでは食糧問題がありましたね。

JICAのアフリカに対する事業は、かなり広がりましたね。ここ数年ものすごく広がった。自負するわけではないんですけど、わたしがJICAに来たときに驚いたのは、JICAの事業費のなかで、アフリカの占める割合は、一五パーセントでした。全部のアフリカを入れてですよ。アジアは四〇パーセント近かった。それはあまりにアンバランスだとわたしには思えたわけなんです。アジアの国はずいぶんよくなってきましたから。

松園 現在は。

緒方 ニーバーセントです。ただお金をあげるわけではありませぬ。事業予算を増やしていくということは、さまざまな事業を増やすわけですから、相当な努力の結果です。なんとかそこまでもってまいりました。

松園 緒方さんはいろいろなところでアフリカにはインフラが必要なんだと言っておられますね。

これまでの日本の政府開発援助はアジアを中心に展開され、しかもインフラ支援が中心だったので、いろいろ

ると批判もありました。しかし、アフリカについては他の地域とくらべてもインフラ整備がはるかに立ち後れているので、どうしてもやらざるをえないということでしょうか。

緒方 必要です、それはアフリカ側が要請してくるんです。そうしないと経済が動かない。貧困という問題については貧困層に対してのチャリティ、慈善活動があつてそれが少し進んでウエルフェア、福祉というアプローチで進んでいくけど、自分たちの力で自分たちの生活をよくするためには、やっぱり経済力をつけなければならぬ。そのあたりになると、いくらかまもった予算がないと動かないということじゃないでしょうか。アフリカを援助の中心におくのが近年の世界的な情勢だと思えます。

松園 アフリカで先端的な工業製品が作られて、それが他の国々に輸出される時代というのはなかなか時間がかかるでしょうね。

緒方 時間はかかるかもしれませんが、さつき松園さんがおっしゃったようにITに対する関心がたいへん高くなってきている。IT関係の援助を要請している国が去年一年のうちに五カ国ぐらいいりました。

ギャップは出てくるかも知れないですよ。それは今まで十分用意がなかったからいろいろなかたちで組み直さなきゃいけない。

松園 今まで日本の国際協力と民族学との接点が少ない理由に、人間や社会を援助の中心においていなかったことがあるだろうし、援助関係者が現地でも多くの住民と直接に頻りに接触することがあまりなかったからだろうと思います。

もうひとつ、アフリカの民族学の研究は、貧しくてもみなさん必要なものはわけ合つて暮らしているような

緒方 そうでしょうか。

松園 協力隊を終えた方が民族学を勉強するというケースも結構あります。

緒方 民族学だけに限ったことではなく、協力隊をやめた方がいろんな勉強をされています。アフリカについて申しますと、かなりの協力隊出身者がJICAの専門家になっていますね。アジアはいろんな学会やいろんな方がたくさんいらっしゃるから、必ずしも協力隊がその後の専門家の中心とは言えない。

松園 最近ではシニア海外ボランティアの制度ができてりして、国際協力について日本でも関心が深く、広がってきています。わたしは開発援助や国際協力に関心がある大学院の学生たちがJICAで支援していただいて、一年くらい海外の開発に関連した調査をして、それで博士論文を書くとか、そういうシステムがあるといいなと前から思つておりました。今はJICAインターンシッププログラムもありますので、院生たちもそれに近いことができるようになりました。

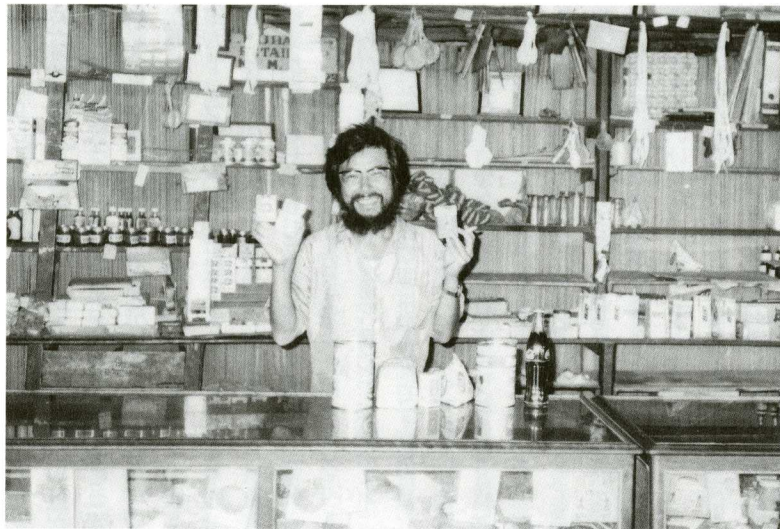
緒方 JICAがするということよりも、JICAと連携して大学が、そういうような措置をとろうとしている動きはすでにありますね。

松園 国際協力の場合、NGOがアフリカをはじめ世界中で活躍していて、日本からも若い人が参加している。JICAはNGOとのネットワークというのはすでにおもちゃです。

緒方 ネットワークとまで言えるかどうかはわかりませんが、せめてNGOの方との連携というものをもう少し組織的にしなければということ、東京の広尾に「地球ひろば」というのを作りました。NGOとの対話やNGO活動のサポートとともに、途上国の暮らしの現状や、地球が抱える問題、国際協力の実際などを、写

平和な村が中心だったということがあると思います。
緒方 よく言うんですけどね、みんなが同じくらい貧乏じゃなければ問題ないんです。格差ですね。いろんな意味での格差が問題です。

松園 わたしも感じますよ。アフリカの農村部で何が起きているかという、朝起きて夜寝るまでみんな同じような生活だった。行動パターンが同じだったのがだんだん変わってきている。なかにはいい農産物をたくさん作って学校給食に売って、お金がたくさん入ってきている人たちもいる。そういう人なんかいちは



村の調査で、時折キオスクの店番もしていた松園(1977年10月 ケニア)写真:松園万亀雄

真・映像・実物資料などで展示するコーナーを作りました。展示のあり方も、モノをただ置いておくということから、動く展示に抜本的に変えましたので、反応はいいようです。

松園 民博と似たようなことをやっていらつしやる笑。
緒方 去年の四月にオープンしまして、一年に七万人の利用がありました。

JICAの他の分野と比べるとものすごく広がりがある早いですね。

松園 そういう展示を考える方がJICAにいらつしやるのでしょうか。

緒方 担当者に愛知の「愛・地球博」を見に行つてくださいとわたしと言つたんです(笑)。JICAも外でときどき博物館などの展示の技術指導もいたしております。

松園 緒方さんはご存じかどうかわかりませんが、JICAの大阪センターと民博とのあいだで毎年おこなっている事業があります。途上国から博物館員を招いての研修を民博が委託しております。

緒方 そうですか。ありがとうございます。
松園 それが始まったのは一九九三年ですから、もう十数年続いています。すでに百数十人が経験を積んで、各地の博物館で活躍されています。民博で研修を三カ月間みっちりやるんですよ。展示の仕方、写真の撮り方、モノを送るときに梱包の仕方、保険のかけ方まで。トレーニングを受けた人たちが国へ帰って、自分たちが先生役となって教えている。JICAと民博の訓練した人たちが先生になって、今は孫たちができつつある。

民博も三〇周年を機会に、新しい構想を取り入れて展示変えをしようと考えています。その際、これまでの

ん最初に携帯電話を使い始めるわけです。今までみんな同じように貧しかったところでお金持ちとそうでない人が出てきている。その結果、教育の程度に差が出てきているということもありますね。

博物館にかかわる国際協力

JICAの事業のひとつに青年海外協力隊というのがありますね。

緒方 わたしはJICAのことは知らなかったけれど、協力隊のことは昔から知っていました(笑)。
——今JICAのなかで協力隊の位置付けというのはどのようになっていますか。

緒方 それはたいへんに複雑な質問です。

今協力隊員がだいたい二三〇〇人ぐらいい、いろんなところにボランティアで行っているんですけど、元々は日本の青年の訓練の一端として始まったんですね。JICAの仕事の開発援助と、それがどうリンクするかということについて、つめた議論があつたわけじゃないんだと思つて。このころはJICA全体の事業ということも合理的にいろいろ整理し始めたなかで、協力隊についても、あくまでもボランティアですが、関連づけができるところは関連づけしていくというように傾向ができています。

世間一般、それは監督官庁も含めてですけど、成果というものを非常に問われるようになりました。

松園 昔、アフリカでまれにしか出会わない日本人はだいたい協力隊の人でした。最初は一九七四年のエチオピア。天然痘撲滅のためにワクチン注射をしまわる青年たちがいて、お世話になった。彼らの体験談は、とても面白いし、こちらも勉強になりましたよ。



JICA「地球ひろば」内にある体験ゾーンで、スタッフから途上国の子ども1日について説明を聞く子どもたち(2007年3月)写真:JICA

博物館研修でつちかてきた海外の人脈がたいへん役に立っています。世界の各地域の展示について、その地域の博物館関係者の意見を十分に聞くことのできるチャンネルができています。民博にとつても、これは大きな財産です。

緒方 ただ一般的にアフリカの博物館は貧弱ですね、本当に。

松園 博物館はお金がかかりますから。

緒方 やはりどちらかというと、モノで伝えるんじゃなくて物語での伝承というのがアフリカでは重要じゃないでしょうか。

松園 コミュニケーションのいろんな媒体のなかでも口頭伝承はひじょうに大事なものです。文字の文化じゃないところもたくさんあります。アフリカの博物

館には独自の展示の仕方があると思います。

モノの展示や文字によるパネル説明のほかに、語り、動画、静止画像、パフォーマンスをたくさん取り入れるといいてですね。ケニアの地方の博物館でも教育や啓発に果たす博物館の役割は、強く認識されてきているようです。

国際協力を志す若者へ

松園 国際協力に話を戻しますと、緒方さんは日本人はもともとしっかり援助したほうがいいと。

緒方 日本の方は現地に行ってみないとわからないと思うんですね。そういうなかで国際的にもっとつながってほしいと思います。わたしは何もJICAの人がいちばん最初にいちばんたいへんな状況のところに行けって言うていっているのではないですよ。それは餅は餅屋と言っんですか、専門性もあるし。ただ、いちばんひどい人道的な危機のなかから、次の段階に移るときに早く出て行って手伝ってあげたらいいと思います。

松園 民族学も、そちらのほうへも広げる必要があるんじゃないかなと。

緒方 わたしは緊急事態のときに研究にいらっしやる必要はないと思いますけども。

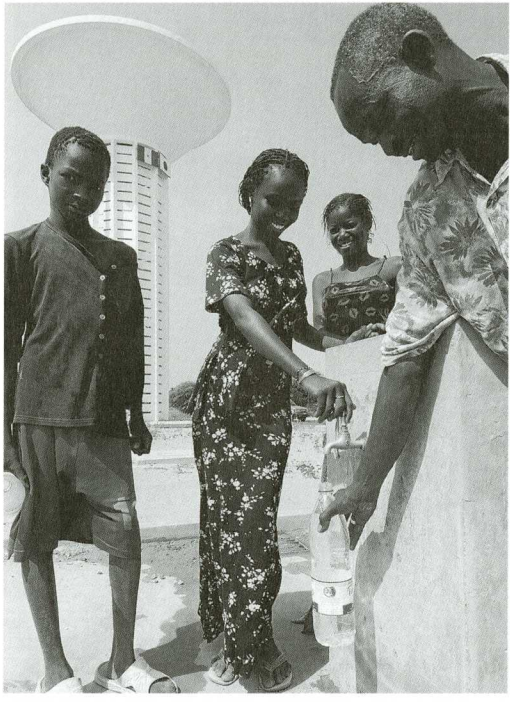
ただ、紛争じゃなくても、いろんなところの文化体験みたいなものですよ。それは教えていただけるとずいぶん早くに援助にかかれる。こういうときにどういこうとをあげるのがいちばんいいか、通じるかという民族学の知識がずいぶん役に立つんじゃないでしょうか。

松園 ODAでやっている大規模なインフラ援助に対しては、マクロ経済学が重要な部分というのは、さつき餅は餅屋とおっしゃいましたけど、わたしたちの分野ではなかなか難しいだろうと。むしろ小規模の橋

なるものですね。

緒方 それから、一九八〇年代に日本がセネガルで見事な給水塔を建てました。独立採算で運営できるように、水管理組合を作って水道料金を集めたんですね。その集めたお金の幾分かを貯金しておいて、修理に使い、必要があれば社会活動にも使う。それは村の女性たちが中心になってやりました。たいへんインプレッシブな成果でしたね。そして西アフリカの女性はみなきれいで見事な服装で水汲みに行きますけども、ちゃんと小さな手帳をもって、それにつけていましたよ。

松園 そういう話を聞くとほっとします。うれしいですね。水を使う仕事は、だいたい女性の仕事になっていきますから、女性中心でうまくいったんですね。協働組合や頼母子講など、女性が中心になってやっているもののほうが、まとまりがよく成功率が高いという事例をわたしも知っています。男女混成チームのなかで女性の活力、能力を發揮してもらおうというのは、今後のアフ

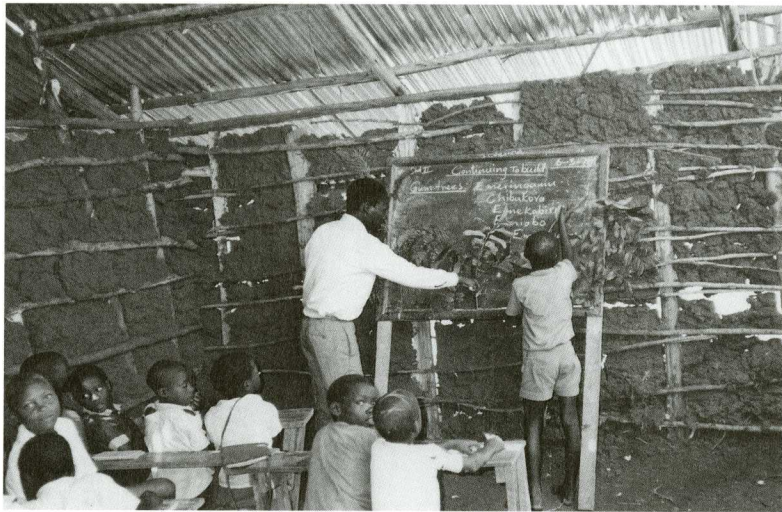


村の給水塔と、近くの共同水道から水を汲んでみせる村人たち (2005年11月 セネガル) 写真: JICA

をかけるとか、井戸を掘るとか、女性や子どものために支援をしていくとか、小学校や中学校の問題とか、つまり地元で展開されていることは、わたしたちはよく見ていますので、そういうもので役に立てればいいなと思います。

避妊について援助するにしても、たとえばコンドームを広めることはむずかしいです。地域の事情を押さえておかなければうまくいきません。

病院や保健所に行けば外国から支援物資で入ってきたコンドームを無料でもらえますが、そこまではパス



村の小学校。親たちが資金を出し合って作ったものがもともとなっていることが多い (1977年8月 ケニア) 写真: 松園万亀雄

リカ社会にとつても大きな挑戦になりますね。

—— 今日のお話でいくつか接点が見出された気がするんですが、国際協力を志す若者へのメッセージがありましたら、緒方さんのほうからお願ひできますか。

緒方 国際協力を志す若い人たちは多いだろうと思うんですね。協力隊の志望者も多いですし、JICAに採用されたいというかなりの人たちがいて、ありがたいことなんですけども。わたしは若いときの勉強は、多様なほうがいいと思うんですね。

すぐに役に立たなくていいんです。学生は基礎的なものを大学で学んで、あとは現場でそれに合わせていくというのがいいと思います。

松園 わたしも今のお話に同感で、基礎的な研究を十分にやっていないと応用もきかないと。

緒方 そつですよね。

松園 ですから、開発、開発といきなり開発人類学をやるよりも、まずはきちんと基本的な調査をやる。そつするとか何をやらなきゃいけないかということがわかるし、住民が何を望んでいるかということもわかる。そこに援助の手助けをするところが、見えてくるというふうにならなは思っています。

緒方 どういう学問体系を大学で勉強したら国際的に役に立つ仕事につけるかと聞かれることがあります。国際関係論を専攻したらいと思っっている人が多んですけども、わたしはたぶんそれは間違っていると思っます。国際関係論というよつな学際的な分野より、もつちよつと専門性の高い

に乗らないと行けないし、半日仕事になる。どんな小さな村にも小さなキオスクがありますから、そこで手数料をとつて手渡せばいいと思っただけですが、これは実現が不可能だとわかりました。誰かコンドームをもらいに来たか村中にすぐにはばれてしまっし、第一キオスクの経営者もそんなものは扱いたくないと言っです。

また、あるクリニックでは、男女を対象に避妊の説明会を定期的にやっていたのですが、男性がひとりも来ない。それで、わたしも意見を言わせてもらって、男女別に、別の日にやるようになって男性が参加してくれるようになりました。

緒方 なるほど、そつですか。

わたしたちも、つねに村の生活に焦点をあてています。たとえば、モザンビークというところでは一九九〇年代に一八〇万人ぐらゐ難民が帰還したんですけども、もともとどのようなかたちで援助していたかという、彼ら難民に食糧の何カ月分かのチケットを与えて、とりあえずの台用品を渡してお帰りのさいにやっっていたんです。それが大量に難民が帰ってくる事態が起りましてね、それじゃ役に立たないと。それでみんなが工夫してやりだしたんですけども、帰っていく村に、学校と医療センターと水ですね、ウォーターポイントを作っていったんです。そうすると帰った人たちが、コミュニティ・ライフを開始できるんです。そういう実験をやりだしたのはカンボジアが最初ですけど、おそらく村々の生活によってはどこにおくとか、何を中心にするのか違っただろうと思っんです。そこまではわたしたちにはわからないのですが、多くの場合はこの三つのポイントをあわせました。

松園 学校とクリニックと水。生活のいちばん基本に

学問を大学のときにはしておいたほうがいい。

松園 それと、緒方さんがつねつねおっしゃっている現場を見ろということ。わたしは旅行のなかで、一日か二日、足をとめて現地のふつ々の民家をのぞかせていただいて、周りの畑も見て、家族の暮らしぶりをせむ見たり聞いたりしてほしいと思います。

緒方 もちろんいろいろなところに旅行してみてください。

難民高等弁務官時代のある時期、「キャンプ・サダコ」といって、学生、あるいは社会人なんかも含めまして、二カ月ぐらゐの体験ボランティアをのつて難民キャンプで働いてもらったことがあるんです。それはとても大きい経験のようでした。受け入れるほうは忙しいので必ずしも評判がよかつたわけではないんですが。

松園 今は経済的にも日本は一段とよくなったので、民族学者も短期間で行ったり来たりするようになった。フィールドワークのやり方も、自省もこめて言っんですけども、かなり変わつてきました。最近では、必ずしもいい方向に変わつているとはわたしは思っておりません。

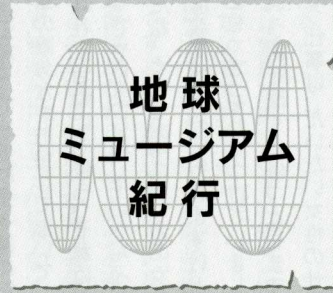
二〇代、三〇代の若いときの最初のフィールドワークは、これという狭いテーマは決めないで、異人としての自分が徐々に人びとに受け入れられていく過程を体験し、そのなかで社会の全体を断片的にでもいろいろと試行錯誤しながらつかんでいくことをやってほしい。その社会にとつての重要な研究テーマをしぼつていくのは、それからのごときです。ですから若い人はかなりの長期間どこかにべつたり張りついて、地元の人々の生活を見てほしいと思っっています。

—— 今日、たいへん有意義なお話をありがとうございました。 (対談進行/池谷和信 本誌編集長)

トン族観光の おすすめ博物館

兼重 努 (かねしげ つとむ)

滋賀医科大学准教授



サンジャン
三江トン族博物館／中国

入りづらいことがその要因と思われる。開館時間や入場料の表示がないばかりか人気もない。参観したければ、外の貼り紙の指示に従って、電話で職員を呼び出さなければならぬ。

せっかく三江まで来ながら、中国で、いや世界で唯一のトン族専門博物館を参観しないのは、非常にもつたいない話である。本館に立ち寄り、三江トン族にかんする予備知識をえたうえで、三江トン族生態博物館をはじめとするトン族の村々を訪れるならば、民族観光の楽しみが倍増するに違いない。

中国広西チワン族自治区の北東の端にある三江トン族自治区はトン族を主体とする民族自治県だ。トン族は人口二九六万人(二〇〇〇年)で、中国西南部の貴州、湖南、広西の三つの省(自治区)にまたがって居住する。

三江県には、三江トン族博物館と三江トン族生態博物館という、ふたつの博物館がある。後者は集落群そのものが「博物館」と命名された野外博物館であり、県内の独峒郷(トクトウ)一帯がそれに該当する。今回は県の中心地の古宜(クイ)にある前者について紹介しよう。

本博物館は三江のトン族自治区成立四〇周年を記念して一九九二年に建設された。県内にはトン族のほかミャオ族、チワン族、ヤオ族、漢族などが住んでいるが、この博物館の展示はトン族に限定されている。中国で唯一のトン族専門の博物館―これが本館の特徴だ。展示はトン族の人びとの習俗や物質文化にかんするカラフルな写真パネルが主体だ。もちろん、物質文化の実物や模型も数多く展示されている。展示室は三つに

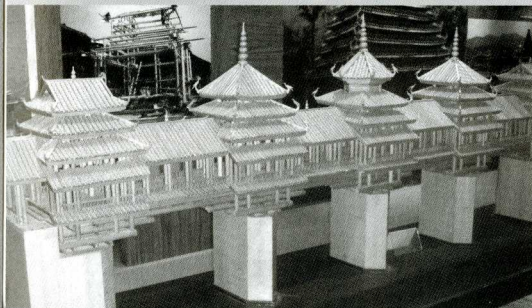
わかれている。

第一室には、三江県一帯にかつて存在した「款」とよばれる社会組織に関連するさまざまな事物が集成されている。「款」の概念図のパネルも付されていて、玄人受けする内容だ。トン族集落の写真や模型の展示もある。

第二室は、トン族の建築と習俗を中心とした展示だ。トン族民家の二階部分が囲炉裏の間を中心に再現され、トン族の生活空間を体験できるようにになっている。興味深いのは服飾関係の展示だ。トン族の服装や髪型の県内の地域差が大きいことがよくわかる。

第三室は、入り口に県内のトン族生態博物館とトン族文化の研究成果を紹介するパネルが飾られている。奥にすむとトン族の民間音楽、美術関係の展示となる。

三江県は近年民族観光にたいへん力を入れており、トン族の村を訪れる観光客の数は増えてきている。しかし、本館の参観者はたいへん少ない。現場を任せられている県文物管理所の職員はたいへん閑そうにしている。観光客のあいだで本館の知名度が低いことに加え、

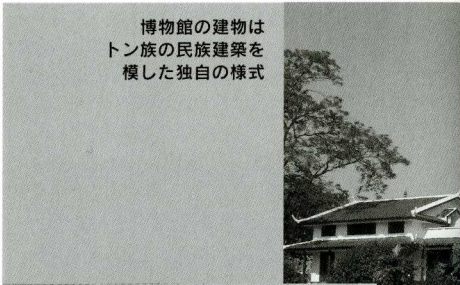


風雨橋(屋根つきの橋)などのトン族建築物の模型はとて精巧だ(第二室)

农民画
The Local People's Painting
三江侗族农民擅长绘画, 形成传统, 其中以独峒乡的农民画最具代表性。曾在国内展览上荣获大奖。这些农民画以家乡的生活为主要题材, 内容丰富, 风格独特, 深受人们喜爱。



トン族の農民が描いた、民族色豊かな絵画も展示されている(第三室)



博物館の建物はトン族の民族建築を模した独自の様式



入り口の看板の漢字の上にはトン語のローマ字による表記も併記されている



参観者には職員が中国語(あるいはトン語)で解説してくれる

オセアニアの櫛くし

右の櫛(展示番号OS0318、長さ/24cm)

左の櫛(展示番号OS0316、長さ/63cm)

小林 繁樹(こばやし しげき)

本館文化資源研究センター

右の短めの櫛は、ミクロネシア地域ヤップ島で使われていた縦櫛である。竹を細かくさいた歯が二二本、二色の細い蔓つるで丹念に巻かれ、洗練された文様を描きながら固定されている。多少、きゃしゃな印象を受けるけれど、美しい櫛である。

ヤップ島では櫛は、少なくとも公共の場において男性だけが使うものであった。しかも厳格な身分制度にともなって、使う櫛のかたちが異なっていた。このロアイニ・ヤップ(編んだ櫛の意)とよばれるかたちの櫛は、ことに青年が日常の暮らしのなかで櫛の結合部分をななめにねじって挿したという。小粋な装いを演出するアイテムとなっていた。

左の大振りの櫛は、やはりミクロネシア地域のチューク(トラック)諸島で使われていた舞踏用の縦櫛である。マングローブと思わ

れる堅木かたきからセンスよく八本の歯を削りだしている。把手とては黒色の植物繊維に白色のビ



ーズをとおして文様を作り、大きく伸びる五本のグンカンドリの羽やウミツバメのうぶ

毛、紅いウミギクガイの円盤を留めたビーズの束などが、大胆で派手な飾りとなっている。チイとかツーとよばれるこの櫛も男性用で、チュークの櫛はその見事さでミクロネシアのなかでも際立っている。

こうした美や富、社会的な地位などを表象する飾り櫛は、かつてはミクロネシアのみならずオセアニア各地で使用されていた。そしてそれはむしろ男性用が多い。しかし二〇世紀始めごろからの近代化西欧化の影響で、男性は長髪だったのを短髪にしだし、飾り櫛は使われないようになってきた。今、男女ともよく使うのは、プラスチック製などの実用櫛である。

伝統的なオセアニア文化を彩るこれらの櫛は、一九七七年の開館以来三〇年間、本館展示場で展示され続け、今も来館者の目を引きつけてやまない。



けがれ、衛生管理、あるいは癒し

森 明子

(もり あきこ)

本館研究戦略センター

衛生という考え方について

ジュディス・オークリーという人類学者が、イギリスの「ジプシー」(※)のけがれについて、おもしろい研究をしている(旅するジプシーの人類学「晶文社一九八六年」)。

たとえば、石鹸は台所においてはならない。ましてトイレが台所の近くにあることなど、とても考えられない。理由は、台所が身体内部に入るものをあつかう領域だからである。石鹸は身体の外面の汚れとかかわるから、台所にふさわしくない。排泄行為は、台所からできるだけ離れた場所、屋外でおこなうことが望ましい。

「ジプシー」は、身体内部と外部の区分を保とうとしているのであって、その境界が曖昧になることを、彼らは「けがれ」として忌むのである。

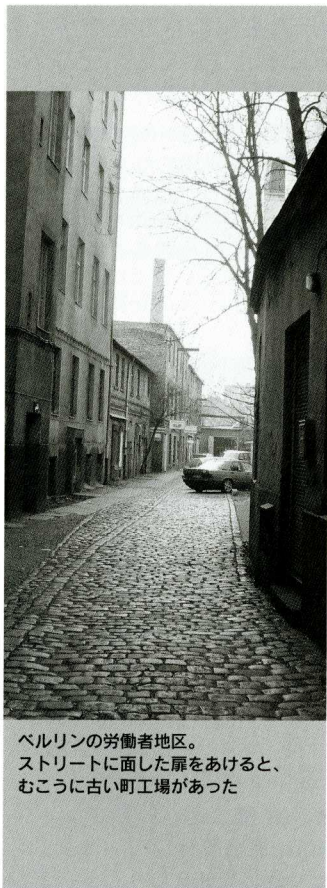
これに対して、白人社会は「衛生管理」によって、「ジプシー」のけがれを制圧しようとする。そこに摩擦がおこる。

わたしは、トイレの衛生管理に賛成する

者の一人であるが、ヨーロッパ人が、トイレと浴室をひとつにすることにについては、かねてから違和感をもってきた。ヨーロッパ人は、浴室をどう考えているのだろうか。

英和辞典でバスルームをひくと、「浴室、化粧室、便所」とある。この三者は、日本では別々だが、ヨーロッパではひとつの空間に統合されているのである。さらに洗濯機が加わり、洗濯場所も兼ねているのがこつである。

ヨーロッパの都市の集合住宅は、一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて多く建設された。当初はトイレも浴室もなかった。労働者の家庭にそれが普及したのは一九六〇年代で、それほど古いことではない。トイレとシャワーが、ほぼ時を同じくしてつけられた。シャワーははじめ、貧困が社会問題に衛生が社会道徳になった一九世紀後半のフランスで、衛生管理の装置として発明された。人を立たせておいて上方から水をかける仕掛けがシャワーであり、軍隊と監獄がその起源だった。



ベルリンの労働者地区。
ストリートに面した扉をあけると、
むこうに古い町工場があった

こうした系譜をもつシャワーが、二〇世紀の労働者住宅で、トイレと同一空間に設置されたのは、ごく自然のなりゆきだったかもしれない。まもなく洗濯機が加わって、現在のバスルームの姿ができた。

バスルームは、排泄行為と身体および衣類の清潔をつかさどり、「水まわり」という共通項によって、建築技術のうえでも合理的なまとまりを構成している。

身体を洗う行為

ところで、こういうバスルームを作り出したヨーロッパ人の「日常、身体を洗う」行為は、わたしたち日本人とは異なっている。

わたしたちは入浴を、一日の汚れを落とし、疲れを癒すものとして位置づけている。風呂を使うときも、シャワーで済ませるときも、それは変わらない。だからわたしたちは夜の入浴を好む。これに対してヨーロッパ人は、朝、シャワーを使うことを好む。バスに湯をはって入浴することは稀で、バススタブをもっていない家庭も多い。

バスルームとは、朝、排泄の用を済ませながら、水を浴びて身体の衛生と身支度を整える空間なのである。こう考えてみれば、わたしたちの感覚にはなじまない複数の機能の組み合わせも、衛生空間として合理的に統合されている、といえないこともない。この空間に、「癒し」を求めるのはやめよう。それこそ場違いというものだ。

※ここではオークリーの著作の用語を引用している

時	論
新	論
理	想 論

東南アジア「15年サイクル説」

田村 克己

(たむら かつみ)

本館副館長

戦後史の流れ

民博が開館したのは一九七七年である。たまたまこの年にわたしは初めて東南アジアの地に足を踏み入れた。当時のビルマ（現国名ミャンマー）は、「鎖国」しており、外交面で徹底した非同盟の政策をおこなっていた。その背景に、東西両陣営による冷戦対立があり、それに巻き込まれないためとビルマの人びとは語っていた。あれから三〇年、東南アジアの政治地図も大きく変化した。そもそもが西側陣営の国々による反共同盟であるASEAN（東南アジア諸国連合）に、今やヴェトナムをはじめインドシナ三国やビルマも加わるようになっていく。

ところで、東南アジアの戦後史は一五年を一区切りとして考えてみるとわかりやすい。第二次世界大戦が終わってからの一五年間は、独立とあらたな国作りをめぐるの混乱の時代であり、この時期の半ばくらいのとき、一九五四年に、ヴェトナムでディエンヒエンフーの戦いがあり、その結果、北ヴェトナム（ヴェトナム民主共和国）は独立を自ざした抗仏戦争の勝利を確かなものとした。この第一期（一九四五―六〇年）に続く一九七五年までの一五年間は、六一年にはじまったヴェトナム戦争が戦われた時期であった。この時期のちょうど真ん中の六七年はASEANが成立した年であり、米軍に

よる北爆が始まったように、もつとも戦争の激化したときでもある。

一九七五年に北ヴェトナムによる南ヴェトナムの「解放」があり、ヴェトナム社会主義共和国が成立する。そして共産陣営に属するインドシナ三国と自由主義陣営のそれぞれがブロック化し、東西冷戦の時代に入る。他方で、この時期（一九七五―九〇年）の半ばくらい八〇年から八一年にかけて、ベトナムの新しい経済政策であるドイモイの試行がおこなわれた。同じころ、中越戦争が起っている。

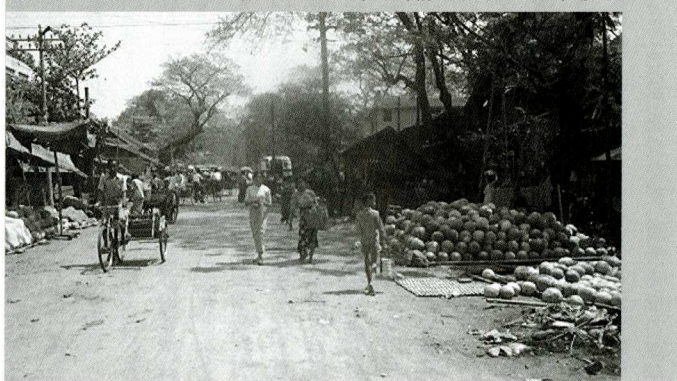
以上の第三期に続くのが一九九〇年以後のアジア経済の成長の時代であり、ドイモイ政策が本格化し、東南アジアは政治中心から経済中心へと移っていく。そしてASEANは「経済共同体」としての性格をもつようになる。しかし九七年にはアジア通貨危機が起り、インドネシアのスハルト政権など、開発独裁の国家運営が破綻を来すことになる。

民博のあらたな貢献

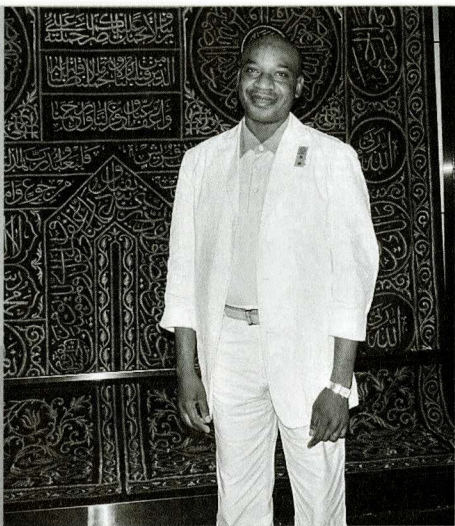
以上のように、東南アジアが戦後一五年ごとの時期で区切られるとすると、ちょうど三〇年前は冷戦期のはじまりに当たり、我が国とのヒトやモノの行き交いも限られていた。三〇年経った現在、企業の進出や観光客の増加は今さらいうまでもない。東南アジアの隅々から発せられる情報量

は飛躍的に増えている。それにしても、東南アジアは今どのような時代にあるのだろうか。上述の「一五年サイクル説」でいくと、二〇〇五年から新しい段階に入ったはずである。グローバル化の一層の進展とともに、製品の流入など地続きの中国からの影響が近年目に付くところである。東南アジアの戦後の流れは、戦争から政治、そして経済へと移っている。とすると、これからは文化の時代となるのである。か。もしそうであるならば、民博もこうした時代へのあらたな貢献を考えねばならないだろう。

初めてのビルマ。30年前のマンダレーの市場にて



民博を訪問したバカリさん
(2006年9月)



バカリさんの広州の事務所には、
さまざまな商品のサンプルが置かれている



オフィスビル(写真中央)はほとんどが
アフリカ商人の事務所である
(2005年 中国・広州)



ソニンケ商人が経営する電化店。中国から
買い付けてきたものが多い(マリ・バマコ中心部)



マリの商店で見つけた
世界各国のジュース

外国人 と生きる

あるソニンケ商人の人生 —アフリカからアジアへ

三島 禎子 (みしま ていこ)

本館民族社会研究部

香港に住んで二〇年

数年前からアフリカ出身の商人を追っかけて、世界の各地を訪ね歩いている。自らを黒いユダヤ人と称するソニンケ民族の商人は、今や地球上のあらゆるところに拠点を置いて、大陸間をまたがった商売を営んでいる。

わたしがバカリ(仮称)さんに出会ったのは、二〇〇〇年の香港であった。バンコクでソニンケの知人に聞いた電話番号を頼りに連絡をとり、重慶大廈(チヨンキンマンション)という雑居ビルの前で待ち合わせをした。この雑居ビルは、ちよつとのぞいだけでも世界各国の人が出入りしていて、一体ここはどこだろうと思うようなおもむきである。もちろんアフリカ出身者の姿もたくさん見かける。いったんなかに入ったら別の世界に足を踏み入れてしまふのではないかなどと想像しながら不安な面持ちでわたしが待っていると、バカリさんはにこやかな顔で近付いてきた。

夏なのにジャケットを羽織ったバカリさんに連れられて行った先は、香港の高級ホテルとして名高い九龍香格里拉酒店(シャングリラ・ホテル)の喫茶であった。運ばれてきたオレンジジュースを飲みほして、氷が融けてしまったあとも、そんなことを意に介さない様子でバカリさんは話を続けた。わたしが聞いたのは、彼の半生についてであった。

当時、香港に事務所を構えていたバカリさんは、アフリカからアジアに渡ってきた

商人のなかではいちばんの古株であった。衣服や電化製品などの商品を買って付けるアフリカの商人と、香港や中国の生産工場を取り次ぐ仲介を中心に、貿易の便宜を図ったり、支払いを代行したりして、手広く商売を営んでいた。彼の顧客たちは、コンテナ単位で貿易をおこなう商人がほとんどである。香港に買い付けに来たり、電話で注目してくる商人は多いが、物価の高い香港に住みついていてアフリカ出身の商人はほんの数人である。バカリさんは無期限の滞在許可証をもち、もう二〇年あまり香港に住んでいる。

異国で資金稼ぎ

しかしながら、商売の出だしはほんとうにささやかなものだった。どうしても父や兄のように商いをやってみたくて、七歳のころからお小遣いを手にすると飽やたばこを買って、別のところでそれらを売って利鞘を稼ぐまねごとをしていた。バカリさん自身はコンゴ共和国に生まれ、父母の故郷のマリで少年時代を過ごしたが、兄たちはコンゴに残ったり、コートジボアールやパリに行ったりして、みな商いにたずさわっていたのである。

父親はバカリさんを手元に置いておきたかったが、バカリさん自身はどうしても異国に行ってみようという気持ちを抑えきれず、家を出してセネガルへ行った。そこで家事手伝いをしたり、農業労働をしたりして、

小金を貯めた。いったん故郷に戻ったが、コートジボアールの首都アビジャンにいる従兄を頼って、父には黙って再び家を出た。パスポートも身分証明書ももっていないが、子どもだったせいかわりにならなかった。アビジャンでは従兄が金銀の商いを営んでいて、商売のノウハウを教えてくれた。その後、ガボンの建設現場で稼げるという話を聞いたので、ガボンがアフリカにあるということも知らずに出かけた。自分のお金を稼ぐというこじか頭になかったという。

民族と家族の歴史を担って

しばらくして再び店がもてるようになったころ、香港や台湾に行つて商品を買って付けるソニンケ商人がいるという噂を耳にした。バカリさんには聞き逃すことのできない情報である。早速、香港へ行こうと考えた。

まず、安い航空券が買えるというナイジエリアへ行き、そこからブリュッセルに飛び、ムンバイ経由で香港に来た。英語はまったくわからなかったが、ナイジェリアで出会ったソニンケ商人が、香港での取引先を紹介してくれた。バカリさんは衣類や旅行靴などを買って付けた。コンゴに送り出した荷物は二、三日ですべて売り切れた。

「やっとやるべきことが見つかったと思えたのは二七歳のときだった。それからはいいことばかりではなく、だまされたり、荷を失ったり、いろんなことがあった。近年の中国経済の発展ともなつて、中国本土では香港に代わつてより安い商品が入りやすくなるようになったため、買い付けに来る商人も香港を素通りするようになってしまった。しかたなくバカリさんも拠点を広州に移したが、家族は香港に住み続けている。

バカリさんに国籍を聞いてみた。「マリ人だ」という。それは、マリ共和国という国家が発行するパスポート所持者であることを示すのだが、同時に、西アフリカの古代王国「マリ王国」の末裔だということの意味している。ちなみに、彼はコンゴ共和国で生まれたから、コンゴのパスポートももっている。さらに香港の返還以前に取得した無期限の滞在許可証の持ち主でもある。

夢に見た異国への冒険を経て、商売を基盤に、バカリさんは自分の人生を作り上げてきた。そこには父や兄たちを追い抜きたいという野心と、ソニンケという民族社会のなかで尊敬される人物でありたいという願望が織り込まれている。自らを誰かと問うとき、バカリさんにはイスラームへの信仰とともに、民族と家族の歴史を担っているという自負心が支えられているように思えた。

「聖地★巡礼—自分探しの旅へ—」 をふりかえって

大森 康宏 (おおもり やすひろ)

本館名誉教授
立命館大学教授

巡礼者がたよりとする
道標(スペイン)



世界には、さまざまな聖地があり、人びとは聖地を目指して巡礼する。人はなぜ巡礼をするのか。

巡礼とは遊び歩く楽しみと信仰の喜びが結びつき、歩くことで自身を見つめ、宿泊地で他人に出会い、癒される。そして心身の疲労からくる幻覚によって、神とめぐりあうように感じられるのが聖地への巡礼である。つまり歩く苦痛を歓喜に昇華させるものである。巡礼した後の人生の自己再生ルネッサンスが、なぜ今、求められているのか。緊張を強いられる不安な現代社会に生きる人びとは、そこに不思議な魅力を抱くようだ。

二〇〇七年三月一五日より六月五日まで開催された特別展「聖地★巡礼—自分探しの旅へ—」は、見学者自身がその回答を求めながら、世界遺産として有名なサンチャゴ・デ・コンポステラの巡礼路について博物館が独自に取材した映像を見たり、出会った人びとのインタビューを聴きながら、ストーリー展開を楽しむ展示となっていた。

展示の中心は、フランスからスペインの西の端まで全行程一三五〇キロメートルを歩くサンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼を記録した映像である。ヨーロッパ人にとつての巡礼といえば、スペインの西の果てに位置するサンチャゴ・デ・コンポステラ大聖堂にある聖ヤコブの墓に詣でることである。そこはエルサレム、ローマと並ぶキリスト教三大巡礼地である。ヨーロッパ各地からの巡礼者が集う場所は、フランスの四つの町にある教会のひとつになる。それはロワール河流域にあるトゥールのサン・マルタン教会、同じ河の上流にあるヴェズレーのラ・マドレーヌ教会、中央山塊の南に位置するル・ピュイのノートル・ダム大聖堂、そして南フランスのアルルにあるサン・トロフィム教会のいずれかが集合する。とりわけ多くの巡礼者が集まるのはルビ

ユイの教会である。フランス人の巡礼者、ミッシェル・ラヴェドリンさんと同行し、彼の話と解説を聞きながら映像による巡礼の旅が展開する。

この巡礼展示と並んで、一九世紀になってから奇跡の場所として聖地となったフランスのルルドや日本国内の四国巡礼、霊場恐山なども、高画質ハイビジョンを駆使した大型映像で紹介した。また、彫刻家の池田宗弘さんが描いたスペイン巡礼路の絵地図やスケッチ、写真家の野町和嘉さんの世界の巡礼写真など異なるメディアの組み合わせによってビジュアルな展示を実施した。さらに檀心みさんによる音声ガイドは視覚的巡礼を聴覚によってイメージを広げ追体験できるように工夫をほどこした。

展示場二階では、研究者の聖地ともいえる世界各地のフィールドで民博が取材した、日常では見ることの少ない映像を鑑賞できた。創設以来三〇年、独自の映像取材を続けてきた民博ならではの貴重な映像を、「同時代に生きる人」として、見学者自身の目で見るように展示した。

聴覚から映像へ

二〇〇〇年、わたしが実行委員長を務めた特別展「進化する映像」では、映像の歴史を視覚だけでなくモノに触れる感覚によって理解してもらうことも目指した展示であった。しかし今回の巡礼展示では、視覚的印象を強調するため、檀心みという一般の人びとに聞きなれた声の導入案内で映像への感情移入がしやすい工夫を試みた。この案内の声と、巡礼移動する映像のリズムとが一体となることから、来館者は一様に映像の主人公と一緒に巡礼している感覚を経験できるようにした。アンケートの結果を見ても、この点についての記述が

多かった。

さらにこの音声ガイドの機器は、来館者に一方的に無料で手渡すことにしたが、二〇パーセントほどの人は借りることなく入場していた。日本では音声ガイドの使用料金を徴収されるのが一般的なので、無料ということに驚きの表情を見せていた来館者が多かった。ガイドの内容については賛否両論あったが、ここではあくまでも、かつて檀心みさんが自分自身巡礼路を訪れたときの心情を語ることにとどめた。具体的な様子は登場人物のミッシェルさんが語るように企画した。聴覚を主にした導入展示は、視覚映像の効果を最大限に引き出すことに成功した。アンケート集計結果でも、この特別展が良かったと感じた人が八三パーセント以上いたことから判明する。

来館者の反応

前述したように、聴覚中心から導入する展示に対する驚き、とりわけ音声ガイドが無料であることに多くの人が喜んでくれたようだ。

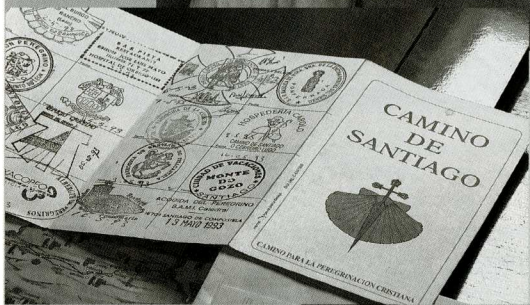
展示の内容に関しては、視聴覚ハイビジョン映像を活用し、かつ大型スクリーンに投影する方式に、来館者は実体験をした気分になり、巡礼を実行したいという思いにさせたことは、展示としては成功したといえるであろう。

映像の構成と歩くりズム感、カメラ・レンズの向く方向といった点に注意して展示した。その効果が非常にうまく来館者の歩む見学移動スピードと合致していた。これも見る側心地よい感覚を与えていた。

アンケートによると映像が伝える内容によって強く感じたことは、自分と向き合うことへの考えや巡礼に



特別展「聖地★巡礼—自分探しの旅へ—」会場にて



サンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼で使われている巡礼手帳



第347回みんぱくゼミナールのあとにおこなわれたサイン会(左)筆者(右)ミッシェルさん

生きもの 博物誌

【ジュズダマ】
ミャンマー



観光資源としての植物

落合 雪野
(おちあい ゆきの)

鹿児島大学総合研究博物館准教授

天然素材の再評価

二〇〇六年一月、およそ三年ぶりにアカ族の村を訪れた。この村はミャンマーのシャン州東部、チエントン郊外にある。なだらかな山の斜面に家々が建ち並び、その先に水田が広がる景観はまったく変わらない。だが、今回は見たことのないものが目に飛び込んできた。

村のあちこちに、首飾りや腕輪、バッグ、衣服といった手工芸品を売る店ができていた。家の軒先にぶら下げる人もいれば、竹竿にかけて洗濯物のように陳列する人もいた。しかもその商品には、大量のジュズダマのなかまの種子が使われていた。

種子のビーズ

ジュズダマは、イネ科の植物である。日本でも水路

や空地などに生え、夏のおわりから秋にかけて灰色の種子を実らせる。この種子はかたくて、つやつやしていて、しかも糸を通す穴が開いているので、ビーズとして使うことができる。ジュズダマのなかまの野生植物が集中的に分布している東南アジア大陸部では、人びとがその種子を使ってさまざまなものを作ってきた。

なかでも、タイ北部やミャンマー東部のアカは、多様なかたち、色、大きさの種子を使いわけて、帽子や衣服、アクセサリーを飾ることに特色がある。その実践、あるいは変化の現場に立ち会おうと、わたしはアカの村々を回っているのである。

前回調査した村の住民は、むかしはもっぱら種子だっただけで、最近ばかりにプラスチックのビーズを使うことが多くなった、残った種子も少なくなったと語っていた。ところが今回は、大量の種子を使ってジ

ユズダマ製品を作り、販売していたのである。畑や庭の一角に植えられた植物も観察できた。この変化は、どのようにしておこったのだろうか。

研究活動の波紋

家々を回って住民に話を聞くうち、意外な結果があらわになった。変化の原因はわたしだったのだ。前回の訪問で通訳をしてくれたガイドは、わたしと住民の仲立ちをするうちに、研究者の関心を理解し、ジュズダマの文化的な価値を認めるようになった。その後、観光案内にジュズダマの説明を加えると、地域の植物について知識をえた観光客は、プラスチックを使った手工芸品を避け、ジュズダマ製品を求めようになったという。この需要に住民が応じ、現在にいたつたのである。

この現象の背景には、最近のチエントンにおける観光産業の拡大がある。また、村は市街から近くアクセスしやすいうえ、周辺の村々をつないだ平坦なコースで手軽なトレッキングを楽しむ観光客も多い。つまり、もともと手工芸品を販売しやすい条件にあったところに、研究者が情報を与えた結果、現金収入をえることのできる植物としてジュズダマが認知され、急激な商品化を招いたのである。

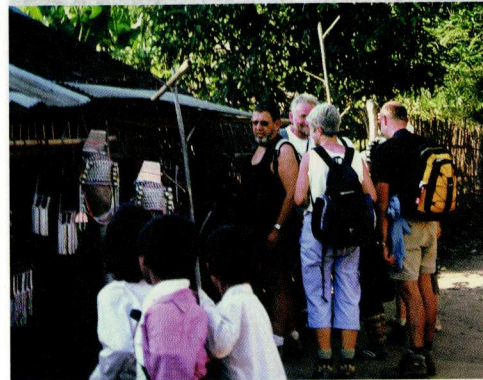
自らが継承してきた植物利用の文化を基礎に、ジュズダマを観光資源として活用するアカの村は多い。その様子を見聞きしてきたわたしが、まさか流れの一部になるとは思いもよらなかった。この村の一件が、さまざまな研究成果の還元機会となるのか、それともただのおせっかいにおわるのか、今後の行方が気がかりである。

バナナやパパイヤといっしょに畑で栽培する。手前にまとまって植えてあるのがジュズダマのなかま



製品を作り、翌年種まきをするための種子

店に集まった観光客



女の子用ヘッドドレスに、白い種子を縫いとめる



女性の盛装用ジャケット。カラフルなパッチワークを囲むように白い種子を縫いとめる。また、白い種子を半分に分けて、房飾りにしている



竹竿に手工芸品を並べる

ジュズダマ (学名: *Coix lacryma-jobi* var. *lacryma-jobi* L.)

イネ科の多年生植物。インド東部から東南アジアを中心にジュズダマ属の野生種、6種類が分布する。ジュズダマはそのなかの一変種で、世界の熱帯、亜熱帯に広く分布し、耕地や集落周辺など、人里の攪乱環境に生育する。植物体全体が薬用植物となるほか、かたい種子が物質文化に利用される。なお、ハトムギは、ジュズダマを祖先野生種として栽培化された穀類で、東南アジア、東アジアを中心に食用、薬用に栽培される。





タオケー

タイの漁民と頭家

小河 久志 (おがわ ひさし)

総合研究大学院大学文化科学研究科

でも活躍する者が多い。

漁民は子分

しかし、頭家に対する村人の評価は一様に低い。彼らと話をしている、たびたび聞かされたのは、取引のある頭家に対する悪口だ。「海産物の買値が町よりも安い。それなのに漁具の売値は高い。これじゃあ食べていけないよ」「海産物の選別（大きさやかたちなど）が厳しくてかなわない」といった経済にかかわるもの。あるいは、「頭家はしよっちゅう街に遊びに行っている」「頭家の子どもは働かず、高校や大学で勉強している」といった裕福さへの羨望などである。なかには、いつ清算できるかわからない負債を抱える将来への不安から、「わたしたちには自由がない」「我々は頭家の子分だが、実際には奴隷だよ」とさえ言う者もいた。

家には、操業資金と海産物の販売先を提供することで、漁民が継続して漁業をおこなうことを可能にするなど、搾取者にとどまらないさまざまな役割があることも、また事実である。ところが、そうした点は無視され、マイナスの側面のみが外部の機関によって強調されることになってしまった。頭家のお宅にお世話になっていたわたしもまた、漁民を搾取する存在として彼らを見ていた。

緊急時の被災者支援

ところが、二〇〇四年二月二十六日にインド洋津波が起きたことで状況は変わった。わたしが滞在した村にも津波は押し寄せ、多くの漁民は漁船や魚網という生活の糧を奪われた。しかし、国やNGO組織からの支援はなかなかやってこなかった。こうしたなかで、支援が届くまでのあいだ、漁民の生活を支えたのが頭家だった。彼らは、当面の生活費として手持ちの現金を傘下の漁民に与えたり、怪我をした者を町の病院に送迎したりした。つまり頭家は、緊急時の被災者支援をおこなったのである。

たしかに、こうした頭家の行為は、漁民を傘下に繋ぎとめておくためという見方もできる。しかし、頭家も津波の被害を受けていた。彼らもまた、漁具被害にともなう長期間の操業停止と漁獲高の減少、海産物の腐敗や価格低下、漁民への貸付資金の焦げ付きに見舞われるなど、厳しい経営環境に置かれていたのだ。しかも、零細漁民をおもな対象にした政府の支援方針や村長による支援金の不正分配のために、わずかな額の支援金しか受け取ることができなかった。それでも彼らは、漁民が郡や県の役場に支援金の申請をする際の交通や取り次ぎの便宜を図るとともに、関係機関に赴き更なる支援の依頼を精力的におこなった。その結果、村人のあいだから頭家への謝辞が聞かれるようになった。それは、津波襲来前にはほとんど耳にしたことのないものであった。津波という予測不可能な事態が起こったことで、奇しくも、搾取者とは正反対の保護者としての性格があらわになったのである。

村の有力者「頭家」

タイの多くの漁村には、頭家とよばれる海産物を取りあつかう仲買人が住んでいる。生産地の仲買人として海産物流通の末端を担う彼らは、貧しい漁民に漁船や魚網といった漁具や操業資金、ときには生活資金を前貸しすることで、水揚げを独占的に買い占めてきた。

わたしが滞在した南部にある人口一〇〇

〇〇人程度のムスリム漁村にも、四人の頭家がいた。彼らは、経営規模やあつかう海産物の種類に違いはあるものの、総じて他の村人よりも高収入である。村では数少ない自動車や洗濯機といった高級消費財も所有しており、富裕層に位置している。また頭家は仕事柄、村外に知人が多く、政治や経済にも通じている。このため、複数の村を統括する区の行政委員をはじめ、村の要職につくなど政治面

このような頭家に対するマイナスの評価は、漁民だけでなく外部の組織も指摘してきた。村にやってくるNGO組織や水産局の関係者は、漁民の苦しい生活の原因として、しばしば頭家との不平等な関係を挙げた。彼らは、パンフレットの配布やセミナーの開催をとおして、頭家は搾取者というイメージを漁民に植え付けるとともに、その撤廃の必要性を主張してきた。しかし頭

害を受けていた。彼らもまた、漁具被害にともなう長期間の操業停止と漁獲高の減少、海産物の腐敗や価格低下、漁民への貸付資金の焦げ付きに見舞われるなど、厳しい経営環境に置かれていたのだ。しかも、零細漁民をおもな対象にした政府の支援方針や村長による支援金の不正分配のために、わずかな額の支援金しか受け取ることができなかった。それでも彼らは、漁民が郡や県の役場に支援金の申請をする際の交通や取り次ぎの便宜を図るとともに、関係機関に赴き更なる支援の依頼を精力的におこなった。その結果、村人のあいだから頭家への謝辞が聞かれるようになった。それは、津波襲来前にはほとんど耳にしたことのないものであった。津波という予測不可能な事態が起こったことで、奇しくも、搾取者とは正反対の保護者としての性格があらわになったのである。

津波から三年近い歳月が過ぎた今、漁

民の日常生活は落ち着きを取り戻した。津波により操業の危機に追い込まれた頭家も、廃業した一軒を除けば、ほぼ津波前の状態にまで経営を回復している。

こうしたなかで、頭家への恩義は忘れ去られ、再び、搾取者として敵視されるのだらうか。利得の追求と、漁民との倫理的な人間関係との板挟みにある頭家。彼らに対する漁民の評価は、これからも揺れ動いていきそうだ。

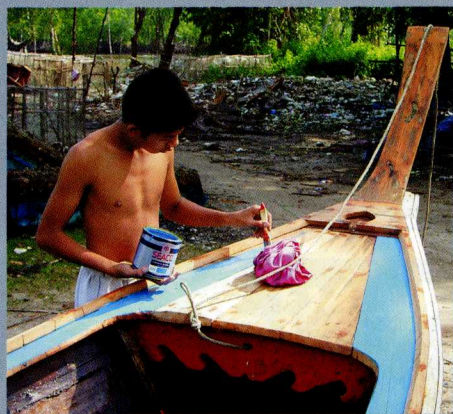


カニを選別する頭家の妻。海産物を種類や大きさにより細かく選りわけ、値段を決める

領収書に水揚げ代を記入する頭家と、それを待つ傘下の漁民



漁船にペンキを塗る漁民。船の補修にかかる費用も頭家からの借金でまかなわれる場合が多い



網から魚を取り外す漁民たち

開館30周年記念

みんなく ウィークエンド・サロン 研究者と話そう

実施日・話者・話題・場所

※ 詳細は、ホームページをご覧ください。

11月11日(日)

松園 万亀雄 (国立民族学博物館長)

究極のスローフード

ー東アフリカ農村の家庭料理

於: 展示場内休憩所

11月17日(土)

特別企画

名誉教授のみんなく案内

栗田 靖之

「ブータン王国 はじめての憲法と選挙」

10:30~11:15 於: 南アジア展示

杉村 棟

「西アジアの生活と絨毯」

11:45~12:30 於: 西アジア展示

藤井 知昭

「民族音楽の世界」

15:00~15:45 於: 音楽展示

大給 近達

「アマゾン調査で学んだこと」

16:00~16:45 於: アメリカ展示

■時間: 14:30~15:30(予定)

■参加費: 無料(ただし、常設展観覧料が必要)

* 毎週土曜日は、小学生・中学生・高校生は無料で観覧できます。
ただし、自然文化園を通行して来館される場合は、自然文化園の入園料が必要です。

11月23日(金・祝)

中牧 弘允 (民族文化研究部教授)

カミとホトケのすみか ー日本の祭にさぐる

於: 日本の文化展示

料理小屋で、夕食を作りながら
たべる兄弟姉妹たち
(ケニア・グシイの村で 1978年)

11月24日(土)

平井 京之介 (民族文化研究部准教授)

ラオスの出家僧 ー私の体験から

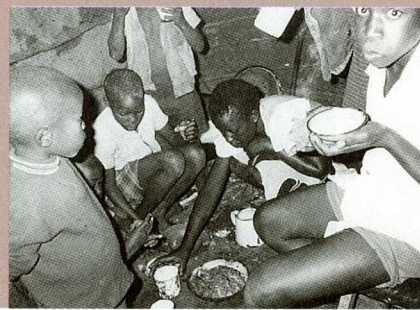
於: 企画展「世界を集める」

11月25日(日)

三尾 稔 (民族社会研究部准教授)

インド神々の世界

於: 南アジア展示



編集後記

民博展示場が一般公開されたのが1977年11月17日、本年おこなわれてきた数々の開館30周年記念事業のピークが今月、本号でも、緒方貞子氏と館長との対談が巻頭を飾る特集記事である。ちなみに10周年、20周年の際の特集記事を振り返ってみると、1987年11月号では開館時の展示に携わった教員による座談会が生まれ、苦労話とともに民博の作り出した展示理念が語られていて、展示活動に対する民博の自信のほどが見て取れる。1997年11月号では外部からの展示評価が特集記事のひとつであった。今号の対談のテーマが国際協力と民族学との関係であるのは、直近の10年間、法人化の流れを受けて、研究活動と博物館活動とのあらたな連携関係を模索してきた民博の変化が反映されている。さらなる今後の10年間で、民博はどう変貌を遂げていくであろうか。とは言え、本誌は民博の広報・普及誌であり、市民と民博との接点のひとつを引き続き担っていくことに変わりはない。市民の方々の応援なくしては成り立ちにくい民博の諸活動へのご支援を、引き続きお願いしたい。(久保正敏)



次号予告/12月号特集
マンガ

2007年11月号

第31巻第11号通巻第362号
2007年11月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話06-6876-2151

発行人 朝倉敬夫

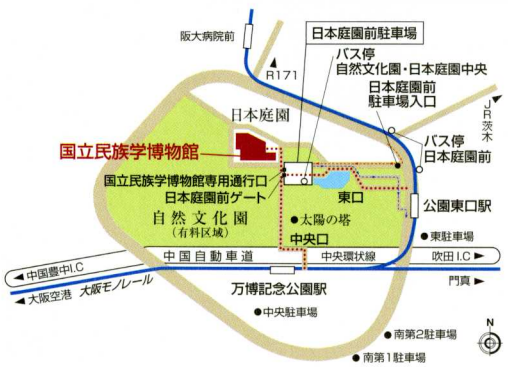
編集委員 池谷和信(編集長) 榎永真佐夫
久保正敏 庄司博史 山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 株式会社博報堂

製版・印刷 アサヒ精版印刷株式会社

●本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ
●本誌掲載記事の無断転載を禁じます



交通案内

- 大阪・千里万博記念公園内
- 大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分(茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。